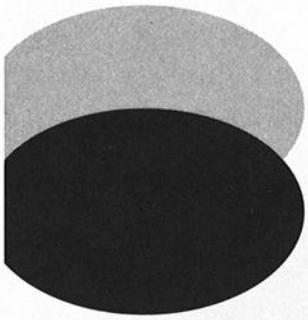
200616

絵本学会NEWS No.26

発行：絵本学会
発行日：2006年1月16日
編集：絵本学会事務局・広報委員会
事務局：〒305-8574茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学芸術学系笹本研究室内
Fax.029-853-2846
http://ehongaku.musabi.ac.jp



絵本学会

絵本フォーラム ’０５報告
絵本研究講座報告
絵本関係 展覧会 インフォメーション
第９回絵本学会大会のご案内
事務局からのお知らせ
・役員選挙
・研究助成事業採択結果
・運営委員会報告

絵本フォーラム’０５「童話の世界を描く絵本」

絵本フォーラム’０５が、７月30日（土）東京の世田谷文学館において開催されました。今回は、「童話の世界を描く絵本」というテーマで、話題提供者に絵本作家の黒井健さん、絵本編集者・装丁家の小野明さん、前聖和大学大学院教授・研究者の鳥越信さんをお迎えし、それぞれ報告と問題提起をしていただきました。

第一部は話題提供者の方々による問題提起、第二部は三部屋に分かれて話題提供者を囲んでの談話サロン、第三部は話題提供者による座談会と参加者の情報交換を行ないました。

今回は、原作が既にある童話（一般に古典・名作童話と呼ばれる）の絵本化についてです。このジャンルには、宮澤賢治、小川未明、新美南吉、アンデルセンなどの童話を原作とする定評のある絵本があり、最近では、酒井駒子『赤い蝋燭と人魚』（小川未明作）、シャーロット・ヴォーク『エルシー・ビドック、ゆめでなわとびをする』（エリナー・ファージョン作）が話題となりました。しかし、童話絵本は、安易な絵本化が多いのも事実です。童話の世界を描く絵本は、原作だけで充分楽しめる文学作品を絵本化するために生じる難しさがある反面、絵本化によって読者の幅が広がり、宮澤賢治原作の絵本のように、同じ作品を異なる絵本作家のイラストで楽しめる面もあります。

そこで、今回もさまざまな立場から、活発な意見交換が行なわれ、みんなで考えあえる場にしたいとのねらいから、テーマを設定しました。

第一部　問題提起

第一部は、三人の話題提供者による問題提起です。

黒井健さんは、宮澤賢治作の『雲の信号』や新美南吉の『てぶくろを買いに』など、評価の高い優れた童話絵本があり、絵本作家の立場から自作について、お話をお伺いすることができました。構想から、７、８年を要したという『ごんぎつね』（偕成社　1986）を製作するときには、読者固有のイメージ世界をこわす可能性があるのではないかと思いながらも、描いていくにしたがって、作品世界に入っていった過程を、具体的に話してくださいました。たとえば、ラストのシーンですが、スケッチの段階では、ごんと兵十がつながっていなかったのが、意図した訳ではないのに、最後にはごんのしっぽが兵十と重なったところなど、黒井さんの絵本作家としての無意識の中にある天才的な才能を感じました。『猫の事務所』（1994）で試みた手法は、人間の猫化、つまり擬人化ではなく、擬物化を意図したということなど、作家ならではの視点からの興味深い話が盛り沢山でした。

小野明さんは、編集者ならではの、童話絵本づくりの楽しさと苦しさを語ってくださいました。25年以上も前に作られた『画本宮澤賢治』(小林敏也画)シリーズは、版画家である小林敏也氏が、絵だけではなく、装丁や刷り色・用紙・製本などの「本づくり」に必要な全ての素材や過程に関わって制作したもので、作品の解釈が、絵本のすみずみにまで生きているという話は、絵本づくりの真髄をみたようでした。また、大人も楽しめる絵本と称して作られたミキハウスの絵本の『ゆきわたり』(方諸良作絵)は、宮澤賢

治ならではの「キックキックトントン」といった言葉が浮かび上がってくるような，あえて色なしモノトーンで鉛筆画の世界で，その幻想性を表現したといった、編集者ならではの裏話をたくさん聞かせてくださいました。

鳥越信さんは、『校訂新美南吉全集　全12巻別巻2巻』(大日本図書　1985)の編集に携わり、また小学校用国語教科書の編集委員をつとめた新美南吉研究者ならではの視点から、「ごんぎつね」絵本の中心に、作品をどう理解し、解釈して絵画化するかを，出版されている「ごんぎつね」絵本の中から、七冊を取り上げて具体的に比較してくださいました。たとえば、ごん自体は，こぎつねと表記されているが、新美南吉は青年期の小ぎつねの物語として描いたものなのに、子ぎつねとして描かれている絵本が多いという指摘には、作品理解の本質を突いたものでした。また、赤い井戸やはりきりあみの描き方も、作品の解釈とともに、舞台となっている新美南吉の郷土、半田の文化の把握が重要なことの指摘がありました。

(第一部報告　岩崎真理子・日本児童教育専門学校)

◎問題提起者のレジュメ　鳥越信（前、聖和大学）

今回のフォーラムは、原作が既にある童話の絵本化について、である。

これは、かつて私が「絵本が実際に作られていく過程」として分析した、（１）文章先導型、（２）絵画先導型、（３）同時進行型の（１）にあたる。とりわけ今回の対象となるアンデルセン、賢治、南吉などのいわゆる古典・名作と呼ばれる作品の絵本化は、先行する文章が動かしがたいもの、つまり削ったり書き直したりできないものとして存在している点が、最大の特色である。

それは民話絵本の場合も基本的には同じだが、グリムやペロー、ジェイコブスなど古典的な再話の絵本化を除けば、再話者が現存しているときには（３）の方法も不可能ではないので、この「文章が動かしがたいもの」としてあることの意味が一層きわだってくるし、従ってその絵本化の難しさが一層よくわかる。

１９５３年から４年間、私は「岩波の子どもの本」の編集者だったが、このシリーズの大半は（１）の文章先導型だった。その為この仕事を通して色々なことを考え、学んできたが、この「動かしがたいもの」に画家がチャレンジして、いい絵本を作ろうとするには、次の二つの点が大切なのだと思うようになった。

（A）「動かしがたい」量の文章を、与えられたページの中で、いかに一つの絵本世界としてレイアウトするか。

（B）その作品をどう理解し、どう解釈して絵画化するか。

そして（A）では『もりのおばさん』が、（B）では『ナマリの兵隊』が、私にとって最も記憶に残る絵本となったが、以来私は、特に文章先導型絵本に接する時には、この二つの点が作品評価の基準となってきた。

そこで今回は、私自身が「校定全集」の編集にかかわり、また小学校用国語教科書の編集委員として、教材研究に取り組んできた、新美南吉の『ごんぎつね』絵本を中心に、具体的に考えることとする。ここで採り上げる絵本は七冊で、題名はすべて『ごんぎつね』である。

（画家名）	（出版社）	（発行年）
箕田源三郎	ポプラ社	１９６９
梅田俊作	小学館	１９８４
いもとようこ	白泉社	１９８５
黒井健	偕成社	１９８６
金沢佑光	偕成社	１９８６
岩本康之亮	チャイルド本社	１９８８
かすや昌宏	あすなろ書房	１９９８

第二部　談話サロン「黒井健の部屋」報告

参加者が多いため自己紹介を省略し、事前に準備した資料「童話の世界を描く絵本　主な論点」を配付し、黒井氏に対する質問を受ける形で進行しました。（イ）童話絵本の絵は挿絵ではなく、絵と作品・文が一体となって一つの世界を構成するものだと思っています（ロ）童話絵本は読者がそれぞれのイメージを既にもっている作品に、画家が絵をつけるこわさと難しさがあります（ハ）重要なのはテクスト・作品の意味をどれだけ汲み取り、イメージを広げられるかにかかっています。黒井氏の発言を前置きとした、黒井氏と参加者との質疑応答の内容は以下の通りです。

・Q作品のイメージはいつ浮かびますか。
　Aいつもアイデアを考えています。写真集を眺めたりしていて浮かんだアイデアはノートに書き込むようにしています。絵が描けるまで寝かせることもありますし、「１回逃げてみる」ということもします。
・Q童話で絵本化したい作品は。
　A宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』。
・Q絵本の主人公は自分と重ね合わせていますか、少し離れて客観的に見ていますか。
　A作品によります。『ごんぎつね』（新美南吉作、偕成社）は重ね合わせていました。
・Q絵を発想するためのエネルギーの貯め方は。
　A基本にある姿勢が大事。描く前にできるだけイメージを広げるように努めています。
・Q絵本作家を目指した時と現在とで変化した点は。
　A描きたいものは変わっていきます。モチベーションを保つよう心掛けています。
・Q好きな作家は。

Aトーベ・ヤンソン、オールズ・バーグなど。

・Q絵本作家を目指しています。コンピューターの使用についてどうお考えですか。

Aなるべく手で描くことをおすすめします。用途を限定して手段として利用することは構いませんが。

・Q絵本が完成するまでの期間は。

A最短４日から数年まで作品によってまちまちです。

・Q童話絵本の場合、綿密なプランを基に描かれますか。

Aプランを立てて描く場合とそうでない場合があります。『ごんぎつね』はそうではありません。第一部で報告の通り、ラフを基に描く段階でイメージがスパークしてきて、結果的にはラフとはかなり違うものになりました。描いたというより「偶然に生まれた、できた」という感じです。宮沢賢治の『猫の事務所』（偕成社）はそういう意味では、計算をして作りました。

・Q童話絵本の場合、過去の作品を参考にされますか。

Aあまり見ません。見ると影響されますから。作品を読み込んで、自分の解釈・理解を深め、それを前提にいかにイメージを膨らますことができるかが勝負だと思っています。

・Q画風を変えてみたくなることはありますか。

Aあります。画風・絵の個性は作ろうとしてできるものではなく、描いているうちに出来ていくものだと思います。

・Q画材の色鉛筆はいつごろから使うようになりましたか。

A大学時代。

・Qどんな絵を描いているときが好きですか。

A風景画。乾いた感じ、湿った感じといった空気感を表現するのが楽しい。

・Q絵本作家を目指す人へのアドバイスを。

A人の真似をしないで、自分の世界を作っていくことです。

・Q現在描きたい絵本は。

A山田太一さんの作品を温めています。まだまだ、沢山のひとの絵を描きたいと思っています。

・Q読み聞かせの会などで、多くの子どもに見せるためグループで絵本を大きく書き直すことについては。

A模写には基本的には反対です。現在、絵本作家の団体でガイドラインを作っています。絵本の読み聞かせは親子のスキンシップの下に行われるのが基本だと思っています。

（黒井健の部屋報告　生田美秋・世田谷文学館）

第二部　談話サロン「小野明の部屋」報告

始めに、参加者の皆さんに一言づつ、自己紹介をしてもらい、小野さんへの質問も受けつけました。編集者の方の参加も多く、もっとじっくり話を聞きたいという自己紹介がたくさんありました。小野さんは、質問に答える形で話を進めてくれました。編集者を目指した理由は、子どもの頃は、本だけが唯一、表現に触れることのできるメディアだったから、とのこと。小野さんは中学生のときには漠然と「本を作る人間になりたい」と思い、高校生のときにははっきりと編集者をめざしていたそうです。編集者になるための条件は、まずは人間が好きなこと。作家、画家、翻訳者と常に相手のある仕事なので、人と会うのが好きな人でないと勤まりません。もっとも小野さんは、哲学や思想、もしくは美術の本を作ることを思い描いていたのですが・・・。転機をもたらしたのは、たまたま書店で手に取った、長新太作『ちへいせんのみえるところ』（ビリケン出版）でした。「そこには、自分が考えていたことの理想的な形があって、身体が震えるのを覚えました」。このときの体験から、絵本が仕事のフィールドに入ったのだそうです。小野さんが目指すのは「自分自身が本気で震えることのできる」絵本。絵本は子どもが主な読者ですが、実際に買うのは大人という問題があります。子どもという手強い読者を相手にすることは、やりがいのあることでしょう。

ちょうどこの日の朝、小野さんがデザインを担当した最新の絵本、ポール・ガルドン作『３びきのやぎのブッキラボー』（北欧の昔話より、青山南訳、小峰書店）の見本が届いたそう。この本を例にとって、絵本作りの実際を話してもらいました。この絵本はマーシャ・ブラウンが絵を描いて、瀬田貞二氏が訳した『さんびきのやぎのがらがらどん』の新しい絵本化です。「がらがらどん」というのは瀬田氏の考えた名前ですが、これをどう変えるか、それがひとつのポイントでした。両者の比較が興味深かったです。

小野さんは編集者であると同時に、デザイナーでありアートディレクターでもあります。さらに絵本や絵本作家を紹介する仕事も多く、プロの絵本作家を続々と輩出している「あとさき塾」で指導にあたるなど、非常に幅広い分野で活躍中です。絵本作家をめざす人には「残念ながら、絵本作家で食べていくのは至難の技です」という厳しい現実も指摘。年間１０冊出版されても、一冊の絵本の印税を作家と折半するとなると、年収は２５０万から３００万という計算になります。それでも絵本を作りたいという人にだけ参加してもらっているそうですが、参加者は後を絶たないそう。絵本はやはり魅力のあるメディアなのでしょう。

絵本の世界のマルチプレイヤーのいきいきとした現場の話に興味はつきず、タイムアップがうらめしい思いでした。

（小野明の部屋報告　灰島かり・翻訳家）

第二部　談話サロン「鳥越信の部屋」報告

出席者の方たちに、まず最初に自己紹介をしていただきながら、鳥越さんへの意見や質問をお聞きしました。参加者は、幼稚園・保育所・小学校・中学校の先生や、地域・文庫・学校等で読み聞かせのボランティアをしている方々、編集者や図書館員など、子どもと子どもの本に関わる様々な立場の方たちでした。また、新美南吉の『狐』(偕成社　1999)を出版している絵本作家の長野ヒデ子さんや、絵本学会の事務局で筑波大学の笹本純さんも鳥越信さんの談話サロンに参加してくださっていたので、いろいろ多角的な視点から討論することができました。

鳥越さんは、童話絵本は、「絵本が実際に作られていく過程」を考えると文章先導型絵本にあたるとして、原作という文章、つまり「動かしがたいもの」に画家がチャレンジして，いい絵本を作ろうとするには、A「動かしがたい」量の文章を、与えられたページの中で、いかに一つ絵本世界としてレイアウトするか、Bその作品をどう理解し、どう解釈して絵画化するか、この二つが重要、そのうちたとえばであると指摘くださった上で、Bとして、「岩波の子どもの本」のアンデルセン『ナマリの兵隊』（マーシャ・ブラウン絵　光吉夏弥訳　1954）の編集に携わったときの話をもとに、具体的に話して下さいました。アンデルセンやグリムなど、原作が日本語でない場合には、さらに翻訳者の作品理解と解釈が必要になり、再話の問題的にも踏み込んだものでした。

その中でも、童話絵本、つまり名作絵本は、それなりの原作の力があるので、タイトルを見ただけで安心して中身を確かめもしないで、購入する読者も多く、悪しき伝統がなくならないないという指摘は、童話絵本を手にする読者への問いかけでもありました。

研究者でもあり、編集者の経歴をお持ちの鳥越さんが、いろいろな失敗談も語ってくれて、楽しく興味深いあっという間の一時間半でした。

(鳥越信の部屋報告　岩崎真理子・日本児童教育専門学校)

第三部報告

まず第二部のそれぞれの部屋の司会者が、内容を報告。それから、参加した皆さんから、質問をつのりました。質問が次々と出て、時間ぎりぎりまで、充実した応答がなされました。

「名作童話をなぜ絵本にしなければいけないのでしょう？」という質問は、本日のテーマのポイントをついたものでした。それに対して鳥越信氏は「名作は必ずしも絵本という形を必要としないだろう」と見解を語ってくれました。「例えば、宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』を絵本にしたいと考える人がいるが、それはよほどの天才か、または本の読みとりができない人ではないだろうか。あれは宮澤賢治が仕上げることができないままになっている本であって、自分には読みとりが不可能に思われる」とのこと。

それに対して黒井健氏は画家の立場から、別の見解を語ってくれました。「私はぜひ絵本にしたいと思っている。それはあるいはバカげた挑戦かもしれない。それでもあの物語には豊富なイメージが存在していて、それを絵に描きたいという思いをそそられる」。研究者の立場と絵本画家の立場の違いが見えて、大変興味深いやりとりでした。これこそシンポジウムの醍醐味と言えそうです。

小野明氏が「ビジュアルな要素は非常にインパクトが強いため、注意が必要だが、ひとつの名作に対して様々な絵本があることは、やはり豊かな文化と言えるだろう」とまとめてくれました。「おそらく太古の昔から、人間は、イメージを絵にしたいという情熱を持ち続けているのでしょう」。

「名作絵本は、次々新しい絵本が出るが、なぜ古い本のままではいけないのでしょうか？」という質問に対して、黒井氏は「画家にとっては、そこに山があるから登るのだ、としか答えようがない」と教えてくれました。以前、ある絵本画家が名作の新しい絵本化を依頼されたときに、その作家は黒井さんの作品があることを意識して「黒井健の出番を無くそう」とライバル意識を燃やしていた、そうです。黒井さんご自身も、既存の絵本作品に対してチャレンジする気持ちがあるそうで、そうやって新しい画家のエネルギーを受けることで、名作は描かれ続け、読まれ続けるのでしょう（結果をお知らせすると、そのチャレンジャーの絵本を見て、黒井さんは「自分の出番はなくならない」と感じたそうで、勝負あった！）

昔話の絵本化についての質問もありました。口承の昔話には様々なヴァージョンがあるために、絵本化にあたって、どれを選ぶか、見識が問われるところです。鳥越氏は「昔話絵本として評価が高い『ももたろう』（松居直再話、赤羽末吉絵、福音館書店）は、さすがに昔話をよく理解したうえでの絵本化であり、ダイナミックで美しい。しかし桃太郎が鬼の差しだす宝を『いらない』と断って、嫁だけをもらってくるという筋は、『ももたろう』が戦時中に国策に利用されたことを受けてということがあるだろうが、昔話としてはありえないと思う」と見解を述べました。小野明氏は「すぐれた作品があると、かえってそれとまったく違う作品を作りたい、という気持ちをかきたてられる」そうで、その結果できあがったのが元祖「へたうま」イラストレーターの湯村輝彦氏が絵を描いた『ももたろう』（川崎洋再話、ミキハウス）です。こちらは、宝物を得て嫁も得るという結末ですが、オーソドックスな絵ではないからこそ出る味、というのがありそうです。黒井氏は「ももた

ろう」はまだ絵を描いていないそうで、意欲をそそられるとのことでした。

すでにあるテキストを使うので、そのテキストへの忠実度も問われます。「物語絵本や昔話絵本で、長すぎる場合はテキストを絵本向きに短くしたものがあるが、テキストの変更について、どうお考えですか？」という質問がありました。小野氏は「テキストは一切変えたくない。改変するくらいなら、その物語を選ばないと思う。絵本にふさわしいもの、という視点でテキストを選ぶことにしている」とのこと。鳥越氏も「私もテキストの改変はのぞましくないと思う」と同じ立場でした。

「ヒュー・ロフティングのドリトルせんせいシリーズが、中に差別語が含まれているため、アメリカでは図書館から追放されている。まったく読めなくなるよりは、その差別語だけを削除するほうがいいと思うが・・・」という質問が続きましたが、鳥越氏は「テキストの改変ということになるので、のぞましくない」とのこと。小野氏も同意見で、文は変えずに掲載し、必要に応じて注をつけるなどして、対応するということでした。ただし小野氏は「そうしているエディターは少数派だと思う」とのこと。司会の灰島より「翻訳者の立場からすると、差別語を変更することはあると思う。ロアルド・ダールの『チョコレート工場の秘密』は、差別語の指摘を受けて、ダール自身が改稿している。著者本人が死亡している場合、翻訳者が差別語を削除することはあるし、そうしないと出版できないことが多い」と別の意見が加わりました。

他にも様々な質問、意見が活発に飛びかい、充実した話あいの場となりましことを、３人のパネラーの方々、参加した皆さんにお礼申し上げます。

（第三部報告　灰島かり・翻訳家）

報告：絵本研究講座「研究の発想と方法論」

研究委員会では絵本学会主催として年に２回の研究講座を企画してきました。１回は絵本作家のお話をききながら一緒に創作を学ぶという主旨で行い、昨年の小林敏也さんにつづき、今年はいわむらかずおさんと楽しいひとときを過ごしました。もう１回の講座は、皆さんの質問などもとりいればがら講演をきくというもので、今年は１１月２６日に、日本女子大学にて研究講座「研究の発想と方法論」を開催いたしました。

この頃、絵本研究に関する出版や新聞記事などが非常に多くなっていますが、その刺激剤として絵本学会の成立や活動があったのではないかと自負しております。今年で８年目を迎えた絵本学会にはこれからより一層の研究成果が求められますが、この辺で地道な活動をと行ったのが、今回の講座です。

絵本研究者もその方法論も多様になり、自分なりの研究方法を模索している若い世代も多いのではないでしょうか。そこで今回は私を含め、３人の先生にどのような研究アプローチがあるのか、それぞれの発想と方法論をお話していただきました。

最初にお話いただいたのは、梅花女子大学大学院教授の三宅興子先生です。「どのように絵本研究を考えてきたか」というタイトルで絵本研究の個人史を語ってくださいました。

研究の流れをご著書からていねいにみせてくださり、絵本を文化史として見ることや、１人だけでなく何人かの研究者で行うプロジェクト研究の醍醐味などを伝えてくださいました。

次に武蔵野美術大学教授で絵本学会会長の今井良朗先生が「デザイン、印刷からの研究」というタイトルで語ってくださいました。１９世紀末の絵本が原画だけでなく印刷技術の違いで面白さが出ていること、日本では絵本作家だがアメリカではグラフィック・デザイナーが絵本に関わっていること、ご自身は展覧会企画を基軸として学芸員的に研究してこられたが、作品を検証しながら見ることにより見えてくるものがあるなどをお話してくださいました。

最後に文教大学教授の中川素子が「境界領域コラージュが描きだす絵本」というタイトルで話しました。コラージュ、アッサンブラージュ、ブリコラージュなど複合させて効果を出す方法を表現だけでなく、研究にもそういった方法論を認め、境界領域に目を向けることで絵本理解もすすむのではと話しました。特に絵本研究にはブック・アートに目を向ける必要があると考えています。

この種の地味な研究講座としては６２名の出席者があり、教室は熱い空気で包まれました。ただ、研究委員長としては、いつもこのような会を関東ばかりでしているので、関西の方には申しわけなく、いつか関西でも行えたらと考えています。また、三宅先生からは、一つの論文をどのように進めたかという話もいいですねというご意見もいただきました。

参加してくださった方々、コーディネーターをしてくださった研究委員の加持ゆかさん、また教室や機器の準備に心を砕いてくださった日本女子大の石井光恵先生、受付や片付けをしてくださった日本女子大学の学生の皆さんに心からの感謝をしたいと思います。ありがとうございました。

（研究委員長　中川素子）

出席者：　会員１４人
学生２３人
一般　９人
学生、スタッフ１６人
計６２名

絵本関係展覧会案内

●軽井沢絵本の森美術館

〒389-0111　長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL.0267-48-3340　FAX. 0267-48-2006

http://www.museen.org/ehon/

info@museen.org

★2006年春の企画展

「グリム童話のあゆみ展　一枚絵と絵本にみる口伝え童話の“かたち”」

会期：2006年3月1日(水)～6月26日(月)

1812年にグリム童話がはじめて世に出て以来、ドイツに根づく民話が集められたこの童話集は、世界中に広まっていきました。口伝えはもちろん、書物や絵本、ビラなどに刷られて、いろいろな国へと届けられたのです。片面の紙に刷られた「一枚絵」と呼ばれる印刷物にも、グリム童話は取り上げられました。

今展では、グリム童話の描かれた「一枚絵」、絵本原画、ポスター、木のおもちゃなどから、当初は口伝えであった民話がどのような形に変化し、世界に浸透していったのかをたどります。そのほか、特集として、絵本の発展にも大きく貢献した「一枚絵の歴史」に焦点を当て、主要なテーマ（切り絵・庶民の暮らし・外国の様子など）ごとに分類した作品を展示します。

●エルツおもちゃ博物館

〒389-0111　長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

電話0267(48)3340　fax.0267(48)2006

info@museen.org

★2006年春の企画展

「北欧おもちゃとデザインの世界展　～森と湖の国からの贈りもの～」

会期：2006年3月1日(水)～6月26日(月)

「森と湖の国」と呼ばれる北欧の国々は、民族・言語・慣習にいたるまで、地理的に隔たりのあった他のヨーロッパ諸国と異なる歴史・文化をあゆんできました。芸術文化の面では「北欧デザイン」と呼ばれる、家具や食器などのインテリアに取り入れられた独自のデザインスタイルが広く知られています。また、北欧では、色鮮やかなドイツやスイスのおもちゃに対し、木地そのままを生かしたシンプルな白木のおもちゃが目立ちます。このように、幾何学的なモチーフ、素材の質感をそのまま生かしたデザインがほどこされたおもちゃや工芸品は高く評価され、世界中の人々の心を捉えています。

今展では、４つの北欧の国々（スウェーデン・フィンランド・ノルウェー・デンマーク）を中心に、木を素材としたおもちゃや北欧デザインが取り入れられた陶器、ガラス工芸品などを展示し、その魅力に迫ります。

●大島町絵本館

〒939-0283　富山県射水郡大島町鳥取50

TEL : 0766-52-6780　FAX : 0766-52-6777

http://www.iijnet.or.jp/ehonkan/

★ひろかわさえこ絵本原画展

会期：12月21日（水）～1月29日（日）

展示原画：『ともだちになろうよ』

『きこえてくるよ　いのちのおと』（アリス館）

プロフィール：

1953年、小樽市生まれ。武蔵野美術大学商業デザイン科卒業。文具のデザイナーを経て絵本の世界に入る。主な作品に『おやすみなさいのまえに…』『ぷくちゃんのえほん』『ことばであそぼ』ほか東京都在住。

★なかやみわ絵本原画展

会期：2月1日（水）～3月30日（木）

展示原画：『そらまめくんとめだかのこ』（福音館書店）

『くれよんのくろちゃん』（童心社）

プロフィール：

1971年、埼玉県大宮市生まれ。女子美術短大造形科グラフィックデザイン教室卒業。企業のデザイナーを経て、フリーとなる。その間、日本絵本童謡美術学院で絵本について学ぶ。絵本に『そらまめくんのベッド』『はりねずみのはりこ』など。埼玉県在住。

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042　東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL 03-3995-0612／テレフォンガイド 03-3995-0820

FAX 03-3995-0680　http://www.chihiro.jp/tokyo/

★ちひろ・線のリズム

2005年11月16日（水）～2006年1月31日（火）

「人間の体ならモデルなしでどんな格好でも描ける」と語ったちひろ。膨大な量のデッサンに裏打ちされたちひろの線には迷いがなく、わずかな線だけで子どもの様々な姿や微妙な心の動きを的確にとらえています。本展では水彩とパステルの線の違いや、初期デッサンの力強い線、書の流麗な線などからちひろの線の魅力に迫ります。

★＜企画展＞リンドグレーン賞受賞記念

「荒井良二のはじまりはじまり」

2005年11月16日（水）～2006年1月31日（火）

絵本作家・荒井良二が、国際的に注目されているスウェーデンの児童文学賞アストリッド・リンドグレーン記念文学賞に輝きました。本展では、初期の作品『ユックリとジョジョニ』から新作まで、代表的な絵本の原画を展示するほか、大きな立体作品も設置します。「斬新、大胆、気まぐ

れで、茶目っ気のある喜びと奔放な自然さ」と評された、荒井良二の世界をお楽しみください。

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原
TEL. 0261-62-0772／テレフォンガイド 0261-62-0777
FAX 0261-62-0774
http://www.chihiro.jp/azumino/top.htm
冬季休館中　12月1日～2月末日

●世田谷文学館

〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10
TEL03-5374-9111　FAX03-5374-9120
http://www.setabun.or.jp/

★花森安治と「暮しの手帖」展

会期：2006年2月4日（土）～4月9日（日）
会場：世田谷文学館　1階企画展示室

戦後日本の出版界でひときわ異彩をはなった家庭雑誌「暮しの手帖」。昭和２３年の創刊以来今日まで、広告をいれず、徹底して庶民の質実な暮しの視線に立った誌面づくりを貫いてきました。

その「暮しの手帖」の創刊から５３年まで、３０年にわたって現役の編集長をつとめながら、装釘家、イラストレーター、コピーライター、デザイナー、ジャーナリストとして多彩な活躍をしたのが花森安治（明治４４年～昭和５３年）でした。

本展では、花森安治の表紙原画・カット作品はもちろん、世田谷の作家たちとの交友も交えて、戦後の文化、ライフスタイルに大きな影響を与えた「暮しの手帖」と、編集長・花森安治のエディトリアル・スピリッツを探ります。

今、生活や暮しをテーマとした雑誌がつぎつぎと創刊され、ファッションやデザインを含めた新たなライフスタイルが若者の間で話題となっています。それらの誌面を飾る「スローライフ」「リサイクル」「エコ」「手作り」「リメイク」、あるいは最先端の「ロハス（Lifestyles Of Health And Sustainability）」といった言葉には花森安治が雑誌でくり返し主張したメッセージと共通するものがありそうです。

長く「暮しの手帖」を愛読した世代だけでなく、ぜひとも若い人たちにも見て、感じて、考えていただきたい展覧会です。

●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1
TEL 0266-24-3319(ミミズク)　FAX 0266-21-1620
http://www.ilf.jp

★西村敏雄・藤村法子ーふたり展

2005年11月11日（金）～2006年2月1日（水）
２Ｆ 第１企画展示室　(最終日は午後５時閉館)

武井武雄の「童画」の精神を受け継ぐべき、第二、第三の武井武雄を発掘しようと始めた武井武雄記念日本童画大賞は、今年で第4回目を迎えます。この第4回童画大賞の開催年に合わせ、2000年に開催された第１回展にて、最優秀賞（信毎賞）を受賞した西村敏雄氏と優秀賞を受賞した藤村法子氏のふたり展を企画しました。

受賞後、おふたりとも意欲的な作品の制作に取り組み、絵本の出版や文具のデザインを手がける西村氏、、他の公募展の入賞や多くの個展を開催する藤村氏。、おふたりの活躍の場は大きく広がっています。

画法や色彩は異なりますが、子どもの心にふれる絵と言う点で童画の精神が根底にあり、未来を担う子どもたちへ語りかける、あふれんばかりの情熱に溢れています。この企画展を契機に、更なる飛躍を願ってやみません。

★「大澤コレクション」展

～2006年2月22日（水）まで
３Ｆ 武井武雄作品展示室

「大澤コレクション」は、武井武雄と親交の深かった大澤三武郎氏が当時毎年開催されていた日本童画家協会展を通して一点ずつ収集してきた作品の総称であり、武井が大澤氏のために命名したものです。

作品は長い間、大澤氏の営む大澤歯科医院の診療室や待合室に飾られ、訪れる大勢の人々の目に触れ親しまれてきました。1997年（平成9年）イルフ童画館の開館に先立ち、より多くの人が武井の童画に触れて欲しいとの願いから、「大澤コレクション」は岡谷市に寄贈されました。イルフ童画館では、毎年「大澤コレクション展」を開催いたしております。

●ワイルドスミス絵本美術館

〒413-0235 静岡県伊東市大室高原9-101
TEL0557-51-7330　FAX0557-51-7331
開館時間：AM10:00～PM 5:00（入館は4:30まで）
休館日：水曜日（春・夏休み、年末年始、祝日は開館）
入館料：一般　700円　団体割引（20名様以上）
　　小学生以下は無料

★「さあ、飛び立とう！２つのぼうけん」展

ワイルドスミスが描いた、動物たちがぼうけんをする絵本『ノア先制の宇宙船』『くまごろうのだいぼうけん』の２作品をご紹介いたします。

★「えほんのかお～ワイルドスミスか描く表紙～」展

ワイルドスミスがこれまでに制作した84冊の絵本の中から、今回は絵本の＜かお＞ともいえる「表紙」に注目します。彼の色彩豊かな世界を心ゆくまでお楽しみ下さい。

◎2005年9月15日（木）～2006年3月14日（火）

第９回絵本学会大会のご案内

第9回絵本学会大会（2006年度）は、2006年6月10・11日の2日間、文教大学（埼玉県越谷市）にて開催されます。プログラム等、未決定の部分もありますが、以下のように予定していますので、ご案内いたします。

★会場：

文教大学越谷キャンパス

〒343-8511　埼玉県越谷市南荻島3337

★大会実行委員会：

文教大学情美術研究室内（中川素子）

電話048-974-8811　内線583

e-mail: ehon@koshigaya.bunkyo.ac.jp

★メインテーマ：

描かれた子ども　描く子ども

★プログラム：

6月10日（土）第1日目

12:30　受付

13:00　開会式

13:30～14:50　山本容子講演会

15:00～16:30　五味太郎に聞く

「五味さんの絵本にみる子ども論」

17:00～　2006年度総会

18:00～　交流会（於：文教大学食堂２階）

6月11日（日）第2日目

9:00　受付

9:30～　研究発表

13:00～　作品発表

13:00～　ワークショップ「光で作る絵本」

（大成哲雄、三沢一実）

14:20～16:20　ラウンドテーブル

R1「子どもが絵本を作ることから」

（パネラー：森田一、田島征三、辻政博）

R2「作家研究：アンソニー・ブラウン」

（パネラー：灰島かり、前山佑司、矢野智司）

16:30～　閉会式

★会期中、学会員の作品展を開催。

文教大学越谷キャンパスは、東武伊勢崎線北越谷駅より徒歩10分です。北越谷には東京都内より30～40分ほどです。

◎文教大学へのアクセス

1.東京駅から

JR山手線上野駅または秋葉原駅経由、東京メトロ日比谷線乗り換え、北千住駅まで。東武伊勢崎線下り方面各駅停車乗車、北越谷駅下車。（所要30分。準急の場合、越谷駅で各駅停車に乗り換え）

2.羽田空港から

モノレール、JR浜松町駅まで。以降、１と同じ。

3.大宮駅から

JR京浜東北線南浦和駅経由、JR武蔵野線乗り換え南越谷駅下車（22分）。徒歩２分の東武伊勢崎線新越谷駅から各駅停車乗車、北越谷駅下車。または東武野田線春日部経由、東武伊勢崎線上り方面各駅停車乗車、北越谷駅下車。

4.新宿駅から

JR埼京線武蔵浦和駅経由、JR武蔵野線乗り換え南越谷駅下車。以降、３と同じ。

◎宿泊につきましては、会員各自にてご手配下さい。（東京都内、さいたま市内など）なお、越谷市内には以下のホテルがございます。

○ホテルサンオーク

東武伊勢崎線新越谷駅（北越谷駅から６分）下車２分

同じ場所に南越谷駅（JR武蔵野線）

電話 048-966-3009

シングル7800円　朝食900円

ツイン13900円（２名）

ツインルームに３名　19000円

同じ建物にイタリア料理店あり

○ドーミーイン谷塚

東武伊勢崎線谷塚駅（北越谷駅から15分）下車２分

電話　0120-4892-08　048-928-8965

シングル6500円　朝食840円

●第９回絵本学会大会研究発表者募集

◎研究発表募集要項

1. 発表者の資格　絵本学会の会員であること
2. 発表テーマ　絵本および絵本の関連のある研究テーマで未発表のもの
3. 発表時間　発表20分　質疑応答10分
4. 申し込み要領

1）発表テーマ、2）発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3）所属機関名・職業など、4）発表要旨（800字程度）、5）発表時に使用する機材（PCプロジェクター・スライドプロジェクター・ＯＨＰ・ＯＤＰ等）

以上1）～5）についてA4の用紙にワープロで横書きで記載したものを絵本学会事務局宛に郵送（ファックス、電子メールなどは不可）して下さい。また可能であれば内容をテキストファイルにし、FD・MO・CDのいずれか（ウィンドウズ等OSを明記）で同時に送って下さい。

5. 申込締切　2006年3月31日（金）（事務局必着）
6. 発表者の決定

研究発表は原則として無鑑査とします。発表順・時間等は5月中にお知らせします。

＊受理した原稿等は返却しません。必ず控えを取って下さい。

●第９回絵本学会大会作品発表者募集

◎大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表します。

◎以下の要領で作品発表者を募集します。

1. 発表者資格　絵本学会の会員であること
2. 発表作品　未発表の絵本。
   個人制作でも共同制作でも可。
3. 発表形態　判型・サイズ・頁数などは限定しない。
   原画を原寸でカラーコピーしたシート（原則として全画面）、およびカラーコピーなどで製本したもの１冊を出品する。
   （デジタルメディアなどを介した発表を希望する場合は事前に問い合わせて下さい。）
4. 発表時間　口頭発表10分　質疑応答5分
5. 申し込み要領
   1）作品タイトル、2）発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3）所属機関名・職業など、4）原画サイズ、枚数
   以上1）～4）についてA4の用紙に記入の上、絵本学会事務局宛郵送で（ファックス、電子メールなどは不可）申し込んで下さい。
6. 申込締切　2006年3月31日（金）（事務局必着）
7. 発表者の決定
   作品発表は原則として無審査とします。作品搬入の期日方法等については後日（4月末頃）連絡します。口頭発表の時間等は5月中にお知らせします。

事務局からのお知らせ

●役員改選に伴う理事、監事候補の推薦について

来年度改選をひかえた理事、監事の候補者の推薦を受け付けます。自薦、他薦による候補者をはがき、または書面にて2006年2月10日（金）までに（当日消印有効）、絵本学会事務局にお届け下さい。

絵本学会役員改選関連の日程は、以下の通りです。

1．理事、監事候補者の推薦受付
   1月中旬発行のニュースで公示
   自薦／他薦による　2月10日締切り
2．選挙管理委員会の設置
3．理事、監事の選挙
   郵送による選挙。
   2月中旬候補者名簿・投票用紙の発送
   3月15日（水）までに郵送投票（必着）
4．新理事・新監事（候補）の確定
5．会長候補の選出
   理事（候補）の互選により会長（候補）を選出
6．会長（候補）任命分の理事候補（３名以内）の推薦
7．会長（候補）による会長代理・事務局長（任命予定者）の推薦
8．総会による新役員の承認　06年6月定期総会

★2006年6月の総会までは現役員が業務を担当する。

●会則抜粋

第8条　（役員）

本会には次の役員を置く。すべての役員は、その任期を就任を承認された絵本学会定期総会からの3年間とする。再任を妨げないが、連続して2期を限度とする。

1. 会長　1名　本会を代表し会務を統括する。会長は理事の互選によって選出される。
2. 会長代理　1名　会長に事故があった場合に会長の代理をつとめる。会長代理は、会長が、理事会に諮って、理事の中から任命する。
3. 事務局長　1名　事務局を統括し会の運営にあたる。
   事務局長は、会長が理事会に諮って理事の中から任命する。
4. 理事　10名　理事会構成員として本会の運営にあたる。
   理事の選出方法は、別に定める。
5. 専門委員会の長は、理事が兼任する。
6. 顧問　若干名　本会の活動の支援者あるいは助言者として、顧問を置くことができる。顧問は理事会の議を経て会長が委嘱する。任期は、理事会の任期に合わせる。
7. 監事　2名　本会の会計を監査し、その結果を総会において報告する。監事は正会員の中から正会員の選挙によっ

て選出される。選出細則は、別に定める。
8. 選挙管理委員　3名　本会の理事、監事の選挙を管理し、選挙結果を総会において報告する。選挙管理委員は正会員の中から理事会が任命する。

●理事選出規則

1. 理事は、10名の内7名は正会員の中から正会員の選挙によって選出される。会長は理事会の推薦を得て、さらに3名の理事を任命することができる。
2. 理事候補者は、選挙の1カ月以上前までに自薦、推薦によって選挙管理委員会に届け出を行なう。
3. 理事候補者は70歳を越えない者とする。但し、会長によって任命される3名の理事は、その限りではない。
4. 理事の選挙は、7名を連記し郵送によって行う。
5. 選挙および会長任命によって選出された理事は、総会の承認を得て決定する。

●監事選出規則

1. 監事は、正会員の中から正会員の選挙によって選出される。
2. 監事候補者は、選挙の1カ月以上前までに自薦、推薦によって選挙管理委員会に届け出を行なう。
3. 監事の選挙は、2名を連記し郵送によって行う。
4. 選挙によって選出された監事は、総会の承認を得て決定する。

●研究助成について

研究会等の活動を助成する研究助成制度に基づき、前号ニュースで申し込みを募集いたしましたが、4件の申請があり、下記の3件について、各3万円ずつの援助をすることが決まりました。

この制度は今後も継続いたしますので、皆様ふるってご応募下さい。

・「こぐま社の絵本」研究会（代表：廣田真智子）
　戦後絵本史における「こぐま社」の絵本研究
・多文化理解をすすめる会（代表：中川素子）
　『絵本で知るあの国この国　世界の絵本展』の運営
・戦後60＋1周年子どもの本・文化プロジェクト
　（代表：正置友子）
　同プロジェクト関連の展示、シンポジウムの開催

●運営委員会

2005年9月23日運営委員会

日時：05年9月23日（日）午後1:25～4：20
会場：板橋区企業活性化センター　研修室
議題：
1．前回記録確認
　前回（7月3日）の議事録を確認した。
2．第9回（06年度）絵本学会大会について
　第9回大会の開催案に基づく検討の結果、下記のように決定した。
　1）共催、後援について
　文教大学或いは文教大学教育学部に共催を依頼するということになった。後援についても、文教大学、越谷市教育委員会、埼玉県教育委員会の後援を得るという案に対し、やはり最適な形を求めて検討していくことになった。
　2）大会テーマ
　「描かれた子ども　描く子ども」とすることになった。
　3）6月10日（土）の午後のプログラムについて
　・司会、挨拶等の役割分担
　・山本容子氏（画家、絵本作家）に講演を依頼する。
　・作家との対談orインタビュー形式の話
　　片山健氏（画家、絵本作家）など。
　・総会の進行方
　・交流会は文教大学の学内で行なう。
　4）6月12日（日）
　・研究発表　研究発表には3室を用意する。
　・作品発表　従来通り行なう。
　・ラウンドテーブル
　　R1　「絵本を作ること」or「美術教育と絵本」
　　R2　「描かれた子ども」
　　内容等、詳細については今後検討。
　・絵本ワークショップ
　　文教大教員による
　5）絵本学会第9回大会実行委員会の編成について
　原案をおおよそ承認。詳細は再度検討していくこと。
　6）宿泊等
　開催地が東京近郊であるため、特別な宿泊案内はせず各自に任せることになった。
3．機関誌『BOOK　END』について
　1）機関誌『BOOK　END』第3号の会計報告
　2）機関誌第3号の売上状況について
　　機関紙の売上状況が説明された。8月末現在、954冊。
　3）次号以降の出版について
　　これまでの形では編集委員の負担過重で、継続困難。新たな出版形態を探る方向で様々な可能性を検討。
　　＜第4号について＞
　　・生田委員を中心に、企画はすすめる。
　　・特集はアニメーションとのリンクについて
　　・1／3は記録性のあるものとする。
4．専門委員会から
　1）企画委員会
　・フォーラム「童話の絵本について考える」の報告
　　参加90名

収入86,000円　　支出65,000円
ＰＲが弱くなっていることを感じた。
テーマがはっきりしていたので、うまく行った。
充実した内容であった。

・企画委員会委員長交代の申し出について
生田委員長より、機関誌第4号の企画を担当することから、企画委員会の委員長を交代して欲しい旨の要請がだされたが、検討の結果、兼任してもらうことになった。

2）研究委員会

・研究講座の開催計画
日時：11月26日（土）　午後1時30分～
会場：日本女子大学
内容：研究についての紹介
講師：三宅　今井　中川

・研究講座ワークショップの報告
9月17日（土）　いわむらかずお美術館
15名の参加
地方の参加者（会員）から、「地方でこうした催しを計画する場合、絵本学会の名称をどのような条件で使用できるか」の質問があったことが加持委員より報告された。検討の結果、「そのような必要が生じた場合は、計画案を事務局へ出してもらい、運営委員会で審議して結論を出す」ということになった。名義使用については断る場合もあることが確認された。
会計として、連絡用の葉書代を含めて25,000円の赤字が出た。広報のポイントを考える必要を感じた。

・研究委員会の活動として、関西でも開催した方がよいのではないかという意見がだされた。

3）紀要編集委員会

今回は、執筆要項の問い合わせが多いため、期待できるのではないか、と報告された。

4）広報委員会

ＮＥＷＳの発行が遅れていると説明。
ＨＰの管理について

5．その他

次回運営委員会の開催は、11月26日（土）研究講座終了後、日本女子大学で行なうことになった。

11月26日運営委員会（詳細な内容は次号に掲載）

日時：2005年11月26日（土）午後5：00～
会場：日本女子大学新泉山館６階　603室（石井研究室）
議題　：

1. 前回記録の確認
2. 第9回（06年度）絵本学会大会について
   プログラムの確認等
3. 機関誌『BOOK END』について
   3号の販売状況など
   次号の刊行について
4. 研究助成金について
5. 専門委員会から
   企画委員会
   研究委員会
   　研究講座等について
   紀要編集委員会
   　８号投稿論文審査結果について
   広報委員会
   　ニュース26号の発行について
6. 役員選挙の実施方について
   手順、日程等
   次年度以降の体制（特に事務局）について
7. その他
   次回会議について